

な観測は、まだ報告されていないようである。

上に示した結果は、上部中間圏・下部熱圏の大循環において、潮汐波ならびに重力波が重要な役割を演じていることを示している。しかし、このモデルではアブリオリな渦拡散係数分布を仮定しており、潮汐波や重力波の散逸の過程は必ずしも現実 に即しては表現されていない。これらの波の散逸はそれ自身のなんらかの不安定によって起こるか、あるいは先に伝播して来てすでに不安定化した他の波によって作られた乱流による渦拡散によって起こっていると考えられ、これらの過程を自己矛盾なく表現する事は、より定量的な議論には不可欠である。これらの波の散逸は平均風だけではなく、プラネタリー波、潮汐波、重力波などが相互に局所的に作用し合った複雑な系のなかで起こっており、この複雑な系のシミュレーション、並びにもし可能ならばそのパラメタリゼーションは、今後の重要な課題のひとつであろう。また、上部中間圏・下部熱圏でのこれらの波の振舞は、観

測的にもまだ不明な点が多々有り、今後の観測の充実が、理論的・数値的研究と共に大いに望まれる。

本稿ではその性質上、文献を引用していない。本稿に關係の深い論文が、“Dynamics of the Middle Atmosphere, Ed. by J.R. Holton and T. Matsuno, 1984, Terra Sci. Pub.” に、多数掲載されているので、興味ある方は参照されたい。

#### 謝 辞

この度、日本気象学会賞を受賞するにあたり、筆者の大学院在学時代以来、研究テーマを始めとして数々の討論、批評、激励を与えて頂きました沢田龍吉九州大学名誉教授、松野太郎東京大学教授、瓜生道也九州大学教授に深く感謝の意を表します。また、日頃から楽しく討論して頂いている九州大学の大気物理、高層大気力学、地球物理の各研究室の皆さんに感謝いたします。

### 国際学術交流基金への募金のお願い

日本気象学会は、かねてから各国の気象関係組織および研究者との学術交流を図るため、国際学術交流基金をもうけて、学会もしくは会員の学術交流の援助を目的とした活動を致しております。実施にあたっては、外国で開催される国際学術研究集会への会員の出席の補助、国際学術交流に貢献する事業の援助などです。昨年は、少額ですが IAMAP への若手研究者の出席の援助を実施し、また、中国気象学会との交流などを致しました。

本来この基金は、少なくとも一千万円程度の元金がありますが、その利息で活動費をまかなうことを目標としていますが、現在のところ、その過渡期として、学会自身の年間予算から毎年約百万円を積み立て、並行して、わずかの一般事業費と篤志による個人寄付金で活動を行って

おります。

基金の基礎を固めるためには、是非、会員の皆様からの御寄付をお願いします。理事会としては、さらには大口の団体寄付を仰ぐべく努力致す所存です。国際学術交流基金の趣旨を御理解いただき、本誌挿入の振替用紙を御利用の上、一口千円として、なるべく多くの御寄付をお願いします。

なお、募金期限は昭和61年12月末日と致しますが、昭和61年度の事業として6月末日を一応の目途としてお振込みいただきますようお願いいたします。

昭和61年4月21日

日本気象学会